

社会福祉実習の効果に関する研究

—社会福祉援助技術に基づく評価項目の検討—

Research on the Effect of a Social Work Field Practicum

—Examination of the Evaluation Criteria Based on Social Work—

鳩間亜紀子・河野理恵・加藤尚子・渡邊浩文

(Hatoma Akiko Kawano Rie Kato Shoko Watanabe Hirofumi)

Abstract :

This study examined the evaluation criteria of a the effect of social work field practicum. Students who majored in social welfare (123 persons in 2004, 124 persons in 2005) answered a questionnaire which made from the viewpoint of three elements (value, knowledge, skill) assumed to be a base of social work. Three factors were extracted as a result of conducting exploratory factor analysis to 27 items, and named "the skills used as the foundation of social work", "the fundamental knowledge about social welfare", and "the target which social work aim at". Three factors were regarded as the evaluation criteria for measuring the effect of social work field practicum.

キーワード：社会福祉実習、評価項目、社会福祉援助技術

Key Word : social work field practicum, evaluation criteria, social work

はじめに

近年、社会福祉サービスの質の評価に関する検討が盛んに行われており、社会福祉職の専門性についての問いかけは、福祉学研究の一テーマともなっている。社会福祉専門職の養成においても例外ではない。社会福祉士は「社会福祉士及び介護福祉士法（昭和62年法律第30号）」に基づく国家資格であり、国家試験受験資格を得るためには、指定福祉施設において180時間の社会福祉援助技術現場実習（以下、現場実習）を行うことが義務付けられている。現場実習は、社会福祉専門職養成の重点に位置づけられるものであり、同時に、その評価方法が課題といえ

る。

社会福祉分野における実習教育の評価基準は、各養成校によるところが大きい、標準化に向けた試みもされている。実習教育の評価に関連する既存研究には、主に統計的手法を用いて分析したものとして、福祉サービス利用者のイメージ・態度¹⁾や、不安／ストレス²⁾、指導方法への満足感³⁾等の視点から、実習教育がもたらす学生への影響を測定するもの等あり、また評価尺度の開発の例⁴⁾もある。福祉現場に身を置き、実際の援助場面に立ち会うことは、とりわけ社会経験が十分でない学生の成長過程においては、彼／彼女らの心理・社会的側面に揺さぶりをもたらすものである。そのため実習教

はとまあきこ：人間社会部人間福祉学科助手

かわのりえ：人間社会部人間福祉学科専任講師

かとうしょうこ：人間社会部人間福祉学科専任講師

わたなべひろふみ：人間社会部人間福祉学科助手

育の評価指標は、実習への姿勢や社会人としてのマナーを含むこともある。

実習教育の評価が多面的であることを踏まえた上で、本研究は実習教育が学生へもたらす心理的影響について測定するとともに、社会福祉援助技術（以下、援助技術）を柱とした評価項目を作成することを目的とした。実習後、学生がフィードバックすることにより、社会福祉専門職としてのスキルを習得するための基礎資料とすることを目指す。本稿においては、援助活動の基盤とされる要素（価値、知識、技術）を問う調査結果を分析し、実習教育前後の比較を加え、実習教育効果の評価尺度の検討を行う。

方法

1. 調査対象

調査対象は、目白大学人間福祉学科の2004年度入学生である。1回目の調査については123名、2回目の調査については124名、それぞれ協力を得られた学生に対し調査を行った。

2. 調査方法

1回目の調査は2004年10月下旬、2回目の調査は2005年5月に行った。1回目の調査は後期講義が始まる前、2回目の調査については、2005年2月本学人間福祉学科において実施され施設見学の事後指導および報告レポート提出が全て終了している新学期オリエンテーション終了後、それぞれ質問紙を配布し、その場で回収した。

両調査の実施については、研究の主旨とプライバシーへの配慮について説明した。加えて、アンケート開始前において模擬の設問を使った回答方法の説明を行い、対象者の理解を促した。

なお、施設見学とは15名の学生グループと引率教員が、高齢者福祉施設（特別養護老人ホーム）、障害者福祉施設（知的障害者更生施設）、児童福祉施設（児童養護施設）、相談機関（児童相談所、福祉事務所）のそれぞれ4領域施設を見学するものである。この施設見学は、社会福祉士国家試験受験資格取得のために定められた実習（本学においては2年次および3年次に

おいて実施される）に向けて、福祉現場の理解や実習への動機づけを目的としている。また、各4領域の現場職員による講義の受講や、施設概要をまとめるレポート提出等の事前学習を踏まえ行われた。

3. 質問紙の構成

先行研究レビューと検討会を行い、質問紙を作成した。質問紙は、基本属性（性別、年齢）に加え、希望する実習先、不安、福祉サービス利用者のイメージ、自己効力感、実習教育効果、の5設問で構成されている。本稿においては、基本属性、希望する実習先、実習教育効果の設問を使用する。

(1) 希望する実習先に関する質問

調査時において、最も希望する実習先を一つだけ選択するものである。回答は、本学における実習先を考慮し、「児童福祉施設」「身体障害児・者施設」「知的障害児・者施設」「相談機関（福祉事務所・児童相談所など）」「高齢者施設」「その他」とした。

(2) 実習教育効果を測定するための質問

実習教育効果を測定する項目は、価値、知識、技術の視点からそれぞれ設定した。

価値については、日本ソーシャルワーカー協会の倫理綱領を参照し、作成した。「人としての尊厳を認められない人もいると思う」「いっしょうけんめい援助しようと思える人とそうでない人にわかれるのも仕方がないと思う」「援助者は自分の考え、意見と違ってでもできるだけ利用者の要望に従わなければならないと思う」等の15項目とした。

知識については、「ソーシャルワークを行う際に、人の話を聞く技術が必要だと思う」「ソーシャルワークは、個人だけでなく様々な集団を対象としていると思う」「利用者が抱える問題は、個人と環境の相互作用で生まれていると思う」等の15項目を作成した。

技術については、全米ソーシャルワーカー協会が1981年に示した「ソーシャルワーク実践に関する分類基準」における技能および能力に関する項目、「社会福祉士専門職教育における現場実習教育に関する研究」（財団法人日本社会

福祉士養成校協会：2003)の項目を参考にした。「利用者の言動を客観的に観察することができますか」「自分が言いたいことを的確に表現することができますか」「利用者が置かれた状況や生活背景を想像することができますか」等の15項目を作成した。

回答は、知識についての項目の半数を「まったく知らない(1点)」「あまり知らない(2点)」「少し知っている(3点)」「かなり知っている(4点)」、技術についての項目を「まったくできない(1点)」「あまりできない(2点)」「少しできる(3点)」「かなりできる(4点)」とし、それ以外の項目は「まったくそう思わない(1点)」「あまりそう思わない(2点)」「少しそう思う(3点)」「たいへんそう思う(4点)」の4件法とした。

4. 分析の方法

1回目および2回目の両調査結果をそれぞれ概観し、比較した。結果、そのデータ構造が同様であると判断し、施設見学を行った後の2回目調査のデータを使用し、実習教育効果の評価項目について因子分析を行った。因子分析により抽出された因子の内的整合性を、信頼性係数(Cronbach's α)により検討した。生成された下位尺度(因子得点)をもとに、1回目および2回目調査における実習教育効果の比較をt検定により行った。

解析には、SPSS for Windows 11.0Jを用いた。

結果

1. 基本属性と希望する実習先

1回目および2回目の調査対象者の概要は、表1のとおりである。性別については、両調査いずれも半数ずつであった。年齢については、18歳から20歳が多くを占めた⁹⁾。

希望する実習先については、1回目および2回目いずれにおいても「児童福祉施設」が最も多く、「身体障害児・者施設」「知的障害児・者施設」を併せた障害者領域は希望する学生が最も少なかった。

表1 基本属性と希望する実習先

		1回目 度数 (%)	2回目 度数 (%)
性別	男性	63 (51.2)	61 (49.2)
	女性	60 (48.8)	63 (50.8)
年齢	18歳	45 (36.6)	0 (0.0)
	19歳	58 (47.2)	97 (78.2)
	20歳	14 (11.4)	18 (14.5)
その他		6 (4.9)	8 (6.5)
希望する実習先			
児童福祉施設		45 (36.6)	45 (36.3)
身体障害児・者施設		5 (4.1)	4 (3.2)
知的障害児・者施設		2 (1.6)	5 (4.0)
相談機関		26 (21.1)	28 (22.6)
高齢者施設		40 (32.5)	35 (28.2)
その他		3 (2.4)	6 (4.8)
無回答		2 (1.6)	1 (0.8)

2. 実習教育による援助活動基本要素の効果

(1) 項目分析

価値に関する15項目の集計の結果は、図1のとおりである。データを概観したところ、q13の偏りが非常に大きく、q8、q12、q15についても同様の傾向がみられた(表2)。

知識に関する15項目の集計の結果は、図2のとおりである。データを概観したところ、q16の偏りが非常に大きく、q17、q23、q28についても同様の傾向がみられた(表3)。技術に関する15項目の集計の結果は、図3のとおりである。データを概観したところ、分布に偏りはみられなかった(表4)。

(2) 探索的因子分析

分布に偏りがみられたq8、q12、q13、q15、q16、q17、q23、q28を除き、因子分析(主因子法)を行った。さらに固有値の変化を概観し、3因子を仮定した因子分析を行った。因子負荷量が十分でない項目を削除し、27項目について再度因子分析を行った。Promax回転後の因子パターン行列は表5のとおりである。

第1因子は14項目で構成されており、「利用者を取り囲む人間関係の理解」「問題解決のための組織づくり」「問題解決のためのリーダーシップ」等、援助活動の技術的要素を問う項目が、高い負荷量を示していた。そこで「援助活動の基礎となる技術」と命名した。第2因子は6項目で構成されており、「社会福祉に関する法律」「社会福祉に関する制度」「社会福祉が歩ん

できた歴史」等、社会福祉の知識を問う項目が、高い負荷量を示していた。そこで「社会福祉に関する基礎的な知識」と命名した。第3因子は7項目で構成されており、「人間の尊厳と人権を守る」「個人と社会の調整を図る」「在宅サービスが望ましい」等、社会福祉活動の基盤となる福祉従事者としての価値観・倫理を問う項目が、高い負荷量を示していた。そこで「援助活動が目指す目標」と命名した。3因子の累積寄与率は47.5%であった。

表2 価値に関連する項目

	平均値	標準偏差	歪度	尖度
1)	2.56	0.81	-0.45	-0.32
2)	2.83	0.68	-0.39	0.40
3)	3.00	0.63	0.00	-0.38
4)	1.93	0.78	0.34	-0.69
5)	2.99	0.70	-0.58	0.72
6)	2.27	0.68	-0.08	-0.37
7)	2.77	0.71	-0.21	-0.06
8)	3.50	0.68	-1.18	0.77
9)	2.02	0.84	0.48	-0.35
10)	3.22	0.73	-1.00	1.58
11)	2.99	0.58	0.00	0.08
12)	1.78	0.84	0.87	0.08
13)	3.69	0.69	-2.53	6.27
14)	3.10	0.71	-0.42	0.03
15)	3.48	0.59	-0.90	1.14

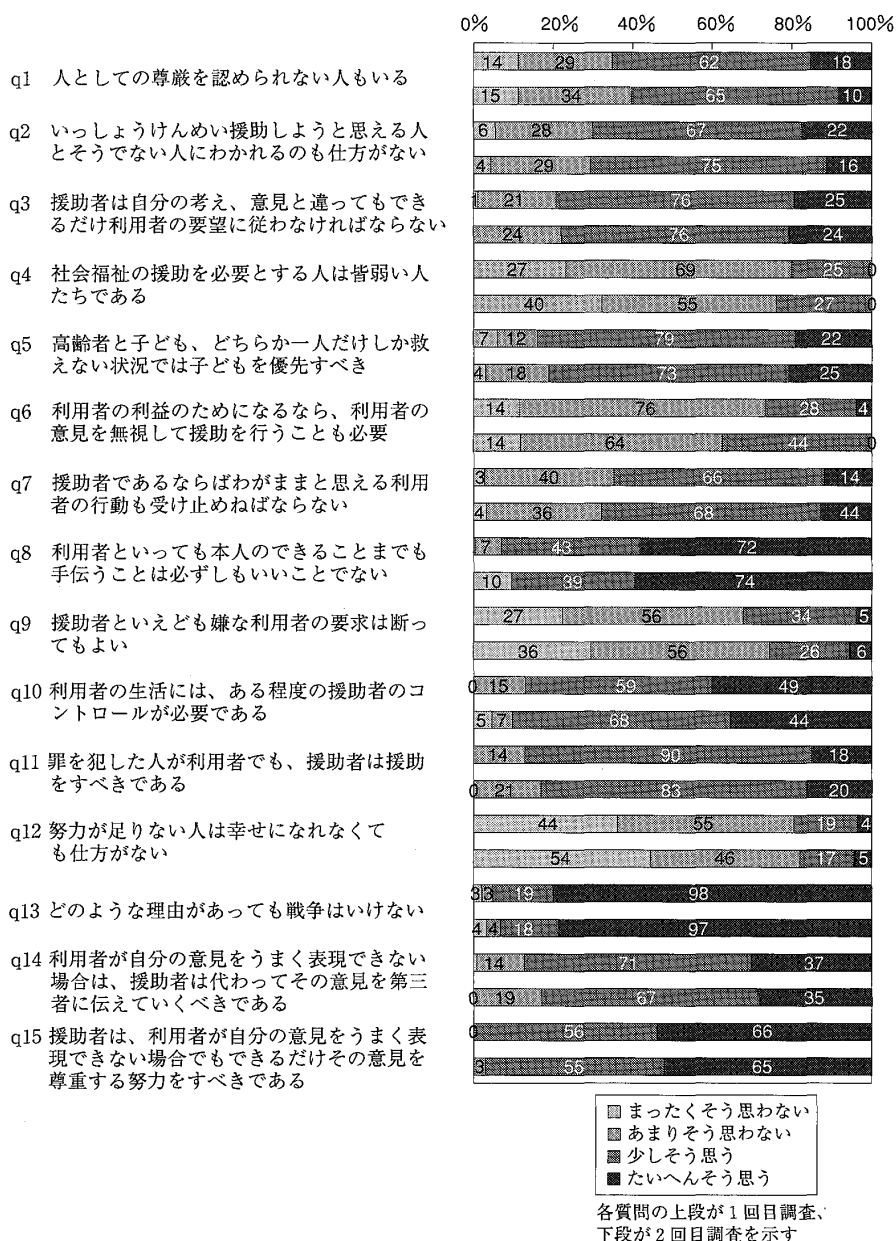
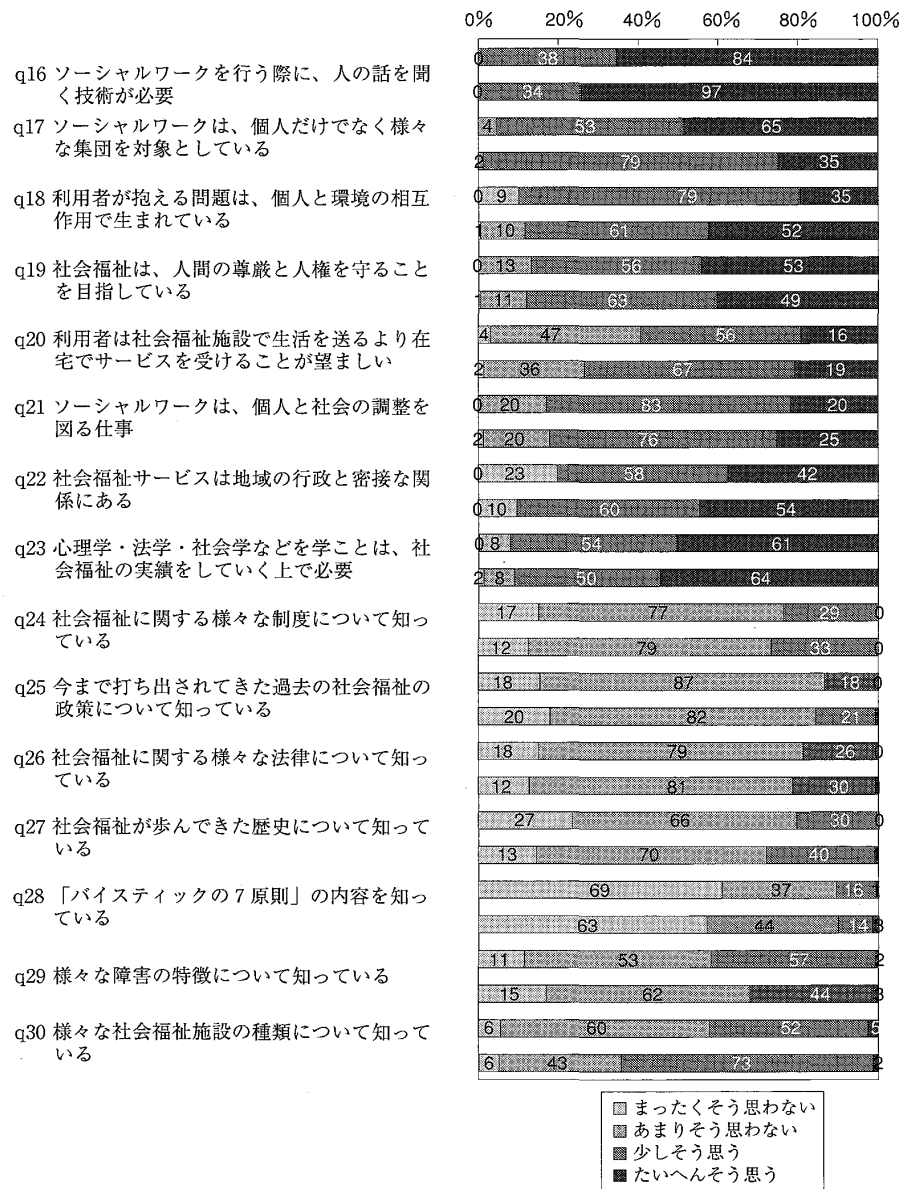


図1 価値に関連する意識の変化

表3 知識に関連する項目

	平均値	標準偏差	歪度	尖度
16)	3.77	0.48	-2.38	7.92
17)	3.48	0.58	-0.81	1.15
18)	3.32	0.66	-0.63	0.19
19)	3.29	0.66	-0.57	0.12
20)	2.83	0.70	-0.05	-0.33
21)	3.01	0.66	-0.36	0.46
22)	3.35	0.63	-0.44	-0.65
23)	3.42	0.69	-1.01	1.11
24)	2.17	0.58	-0.03	-0.20
25)	2.02	0.60	-0.22	0.53
26)	2.16	0.60	-0.19	0.32
27)	2.23	0.64	-0.06	-0.32
28)	1.65	0.78	1.01	0.44
29)	2.28	0.71	-0.04	-0.35
30)	2.57	0.61	-0.71	0.06



各質問の上段が1回目調査、
下段が2回目調査を示す

図2 知識に関連する意識の変化

表4 技術に関連する項目

	平均値	標準偏差	歪度	尖度
31)	2.78	0.68	-0.32	0.21
32)	2.58	0.70	0.08	-0.25
33)	2.81	0.63	-0.43	0.65
34)	3.36	0.63	-0.65	0.49
35)	2.84	0.75	-0.31	-0.08
36)	2.67	0.69	-0.24	0.01
37)	2.50	0.74	-0.14	-0.26
38)	3.11	0.69	-0.60	0.80
39)	2.51	0.78	0.27	-0.39
40)	2.52	0.73	-0.01	-0.24
41)	2.94	0.71	-0.35	0.15
42)	2.85	0.70	-0.21	-0.06
43)	3.08	0.71	-0.68	0.93
44)	2.82	0.79	-0.18	-0.47
45)	2.89	0.66	-0.24	0.21

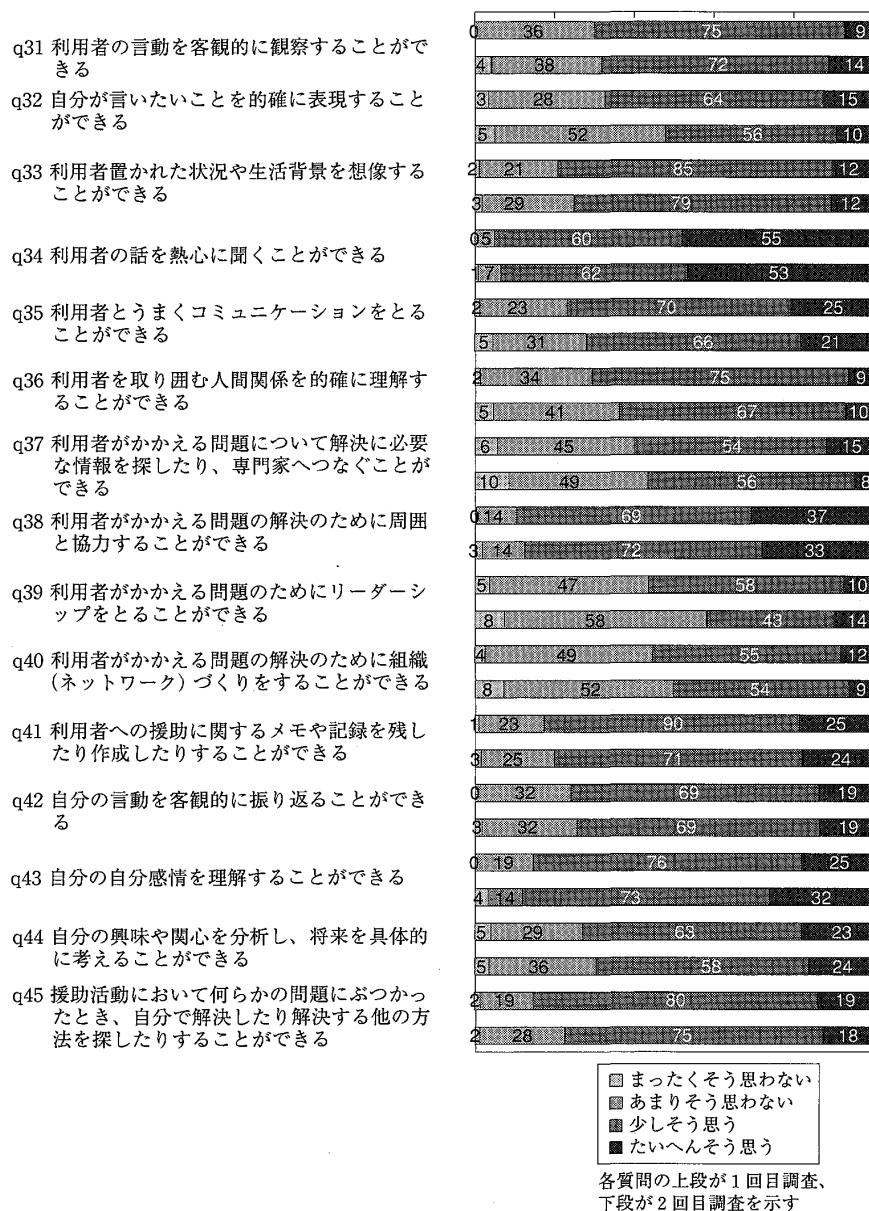


図3 技術に関連する意識の変化

表5 因子パターン

項目	1	2	3	α	
援助活動の基礎となる技術					
36) 利用者を取り囲む人間関係の理解	0.825	-0.106	-0.190	0.904	
40) 利用者が抱える問題の解決のための組織づくり	0.765	-0.035	0.051		
39) 利用者が抱える問題の解決のためのリーダーシップ	0.713	0.033	0.001		
33) 利用者が置かれた状況や生活背景を想像する	0.689	0.056	-0.133		
35) 利用者とのコミュニケーション	0.666	-0.014	-0.098		
37) 利用者が抱える問題の解決に必要な情報の探索	0.665	-0.146	0.109		
32) 自分が言いたいことを的確に表現する	0.659	0.051	-0.069		
38) 利用者が抱える問題の解決のための周囲との協力	0.593	-0.088	0.219		
44) 自分の興味関心を分析し、将来を具体的に考える	0.568	0.076	0.093		
31) 利用者の言動を客観的に観察する	0.557	0.128	-0.196		
43) 自分の感情を理解する	0.537	-0.090	0.099		
42) 自分の言動を客観的に振り返る	0.519	0.076	-0.088		
41) 援助に関するメモや記録の作成	0.492	0.119	0.191		
45) 問題にぶつかったとき解決する	0.480	0.237	0.094		
社会福祉に関する基礎的な知識					
26) 社会福祉に関する法律	-0.050	0.843	0.039	0.865	
24) 社会福祉に関する制度	-0.040	0.791	0.007		
27) 社会福祉が歩んできた歴史	-0.067	0.757	0.093		
25) 過去の社会福祉の政策	-0.013	0.704	0.015		
29) 様々な障害の特徴	0.082	0.667	-0.101		
30) 様々な社会福祉施設の種類の種類	0.164	0.561	-0.004	0.685	
援助活動が目指す目標					
19) 社会福祉は人間の尊厳と人権を守ることを目指す	-0.024	-0.072	0.707		
21) ソーシャルワークは個人と社会の調整を図る仕事	0.160	-0.015	0.592		
20) 利用者は在宅でサービスを受けることが望ましい	-0.133	0.056	0.555		
18) 利用者が抱える問題は個人と環境の相互作用による	0.144	0.043	0.410		
22) 社会福祉サービスは地域の行政と密接な関係にある	0.023	-0.057	0.404		
1) 人としての尊厳を認められない人もいる (R)	-0.102	0.052	0.389		
10) 利用者の生活には援助者のコントロールも必要	-0.101	0.095	0.345		
寄与率 (%)	29.2	9.6	8.8		
累積寄与率 (%)	29.2	38.8	47.5		

因子抽出法：主因子法，回転法：Promax回転

(R) は逆転項目

表6 1回目調査と2回目調査の平均値の比較

	1回目	2回目	t値
援助活動の基礎となる技術 (n=98)	2.87 ±0.39	2.81 ±0.44	-1.38
社会福祉に関する基礎的な知識 (n=103)	2.19 ±0.45	2.26 ±0.49	1.66
援助活動が目指す目標 (n=103)	3.02 ±0.34	3.11 ±0.34	2.60*

*p<.05

3因子の内的整合性は $\alpha=0.68\sim0.90$ を示し、十分な値が得られたため、各尺度項目を加算し3つの下位尺度を作成した。

(3) 1回目調査と2回目調査の比較

下位尺度の平均得点について、実習教育前後における差を検討した。下位尺度それぞれに欠損がなく1回目調査と2回目調査に対応のあるサンプルについてt検定を行った結果、「援助活動が目指す目標」について有意差が認められた(t 値=2.78)(表6)。

考察

1. 希望する実習施設・機関

学生が希望する実習先について質問したところ、施設見学を柱とする実習教育前後の変化は見られなかった。目白大学が1年次において実施する施設見学は、施設・機関の役割や機能の基礎的理解を促し、2,3年次に行なう現場実習への動機付けをその目的としている。内容については、学生が援助技術関連科目を受講していない学年であることから、施設・機関の見学と概要説明が中心であり、利用者の生活状況や実際の援助場面を十分に把握するまでは至っていない。したがって、施設見学をきっかけに実習先希望が大きく変化することはないと考えられる。

また、児童福祉施設、高齢者施設、相談機関に集中しており、障害者領域の施設を希望する学生が非常に少ないことが特徴的であった。田中ら(2004)が行なった研究によると、実際に知的障害児・者施設での実習において利用者とのかかわりを持った学生の抵抗感・恐怖感は減少し、しかしながら、偏見が解消されても、知的障害児・者への態度が積極的な援助的態度になるとは限らないことが示唆されている。実習教育の効果を上げるためには、障害児・者への積極的な援助態度に影響を及ぼす要因を明らかにし、事前学習において十分な指導を行なうことが求められると考える⁹⁾。

2. 実習教育の効果に関する評価項目

援助活動の基盤とされる3要素(価値、知識、技術)から、実習教育効果を測定するための45項目を作成し、分析に耐え得ると判断した27項目について因子分析を行なった結果、3つの因子が抽出され、それぞれを「援助活動の基礎となる技術」「社会福祉に関する基礎的な知識」「援助活動が目指す目標」と命名した。また各因子内の内的整合性は十分な値であったことから、得られた3因子を実習教育の効果を測定する評価指標と判断した。

「援助活動の基礎となる技術」は、技術の視点から設定した項目で構成されており、項目作成の参考とした既存の評価表や報告を支持する結果であった。

「社会福祉に関する基礎的な知識」は、武田(2001)が因子分析を用いて作成した実習評価表で示されている、「知識・理論の修得」を構成する「実習開始時に実習施設(機関)の概要を学習していた」「実習施設(機関)の理念、役割、機能を理解した」等と関連がある内容であった。社会福祉分野が対象とする利用者あるいは施設・機関の種類は、非常に広範に及ぶものである。よって現場実習においては、社会福祉共通の援助技術に加え、各領域や施設・機関に応じた事前学習を行なうのが通例である。本研究においては、特に社会福祉共通の援助技術を取り上げたものであるが、実習施設や内容を反映した評価項目を作成する必要があると考える。

価値の視点から設定した15項目については、分布の偏りや因子不可量が十分でないことから、多くを分析から除いたが、知識の視点から設定した項目による「援助活動が目指す目標」は価値に関わる内容であり、妥当な結果とみなした。実習教育効果の評価においては、変化の有無だけではなく変化の内容を測定することも必要となるが、価値や倫理については高低や大小あるいは正否を付けることは容易ではない。高橋(1990)は、講義や演習で学んだ知識や理論、技術を深め、援助専門職としての専門的自己(professional self)を形成するために、現場実習が展開されると述べたうえで、現場実習に

において求められる態度や姿勢として、「①社会福祉実践にかかわる学生としての倫理性、②施設、機関の利用者や職員に対する誠実で謙虚な姿勢、③関係を持つすべての人々を尊重する豊かな人間性、④主体的、実践的に学習しようとする“やる気”、⑤学習成果を自らの生涯の専門社会福祉実践を通して社会に還元していく決意等」を示しており、本研究においては、実習生としての姿勢に関する項目を補強する必要があるといえよう。

3. 1年次における実習教育効果

因子分析によって作成した下位尺度得点を用い、施設見学前後の比較を行なった結果、「援助活動が目指す目標」について有意差が認められた。社会福祉の知識や援助技術に関する効果については変化を捉えることができなかったが、今回の調査が、1年次という専門的知識が不十分な学年を対象としていることから妥当な結果と判断した。

1年次において施設見学をする目的は、現場実習の準備段階として、施設・機関の理解や実習への動機付けである。援助活動が目指す目標に関する意識を高めることは、社会福祉専門職としての知識や技術の土台となるものであり、2年次以降の専門科目教育の効果を高める上でも、施設見学が有効であったといえよう。換言すれば、1年次の評価については、「援助活動が目指す目標」に焦点化したものを使用することが、適切であると推測される。

課題

本研究は、本学の1年生を対象としたものであり、実習教育効果の評価項目を検討する対象としては限界があった。社会福祉や援助技術に関する専門科目ならびに現場実習を受講する2,3年次への調査を、継続的行なう必要性がある。

また、事前に作成した評価項目が、分布の偏りがあり統計的分析を断念したものが少なかった。項目のワーディングや構成については、本稿の分析結果をもとに、修正することが課題

となった。

〔註〕

- (1) 田淵ら（1997；1998）は、実習によって学生が抱く福祉施設利用者のイメージや態度の変化や、内的変化について、実習前後の比較を行っている。田淵 創・竹内一夫・田口豊郁・ほか（1997）「社会福祉実習が学生に与える効果についての研究（1）」『川崎医療福祉学会誌』7（2），369-372。田淵 創・竹内一夫・田口豊郁・ほか（1998）「社会福祉実習が学生に与える効果についての研究（2）」『川崎医療福祉学会誌』8（1），161-164。また、田中ら（2004）はサービス利用者を知的障害者に絞り、実習による抵抗感や偏見の解消度を測定した。実習教育の評価の検討を目的とするものではないが、実習教育のあり方を検討する際の参考資料となるものである。田中淳子・須河内貢（2004）「知的障害者に対する援助経験による態度変容に関する基礎的研究」『岡山学院大学・岡山短期大学紀要』27，59-67。
- (2) 学生が抱える実習に対するストレスの検討は、既存のストレス尺度を使用した原田（2001）の研究例がある。原田奈津子（2001）「福祉現場実習における学生への支援のあり方について—福祉スーパービジョンの導入に向けて」『研究助成論文集』明治安田こころの健康財団，137-144。
- (3) 荒川ら（2003）は実習終了後の学生に対し、スーパービジョンの満足度を調べた。荒川義子・藤井美和・大和三重・ほか「社会福祉実習におけるスーパービジョンの研究—スーパービジョンに対する学生の満足度に影響を与える要因について」『社会学部紀要』95，関西学院大学，71-78。
- (4) 武田（2001）は、実習の評価を「実習態度・意欲」「基礎知識・技術」「実習日誌・記録」の3側面から測定し、さらに現場の実習指導者による評価とも比較した上で、評価表の検討を行った。武田加代子（2001）「社会福祉実習評価表作成の試み」『華頂短期大学研究紀要』46，39-52。

- (5) 学生の年齢については、1回目調査においては18～19歳以外を、2回目調査においては19～20歳以外を、それぞれ「その他」とした。
- (6) 本研究においても利用者（高齢者・障害者・子ども）のイメージを質問している。「施設見学が福祉専攻大学生の心的状態に与える影響の検討—高齢者、障害者、子どもに対するイメージ、実習に対する不安、自己効力感に焦点をあてて—」を参照されたい。

〔引用文献〕

日本ソーシャルワーカー協会

<http://www.jasw.jp/frame03/frame03.htm>

全米ソーシャルワーカー協会, 日本ソーシャルワーカー協会国際委員会訳 (1997) 『全米ソーシャルワーカー協会ソーシャルワーク実務基準および業務指針』 日本ソーシャルワーカー協会.

財団法人日本社会福祉士養成校協会 (2003) 『平成14年度厚生労働科学研究費補助金政策科学推進研究事業 社会福祉士専門職教育における現場実習教育に関する研究 平成14年度総括・分担研究報告書 (主任研究者: 米本秀仁)』 26-29.

田中淳子・須河内貢 (2004) 「知的障害者に対する援助経験による態度変容に関する基礎的研究」『岡山学院大学・岡山短期大学紀要』 27, 59-67.

高橋重宏「第4章 大学における社会福祉教育の展開」『シリーズ福祉教育第6巻 社会福祉の専門教育』 光生館, 1990.